

降
霰

〔東雅一天文〕雪ユキ略○中 雪と雨と雜り下るをミヅレといふは、水降の轉語なるに似たり。

〔倭訓栞前編三十〕みぞれ 倭名抄に、霰また霰をもよめり、水あられの急語成べし、孫愔も霰は雨

雪相雜也といへり、新撰字鏡には霰をよみ、日本紀には雨水もよめり。

〔日本書紀二十四〕二年三月、是月風雷雨、氷行冬令、

〔續日本紀七〕正靈龜二年四月戊午、雨霰、

〔萬葉集抄二〕霰あられ打安良禮松原住吉之弟日娘與見禮常不飽香聞、

此歌古點には、み。ぞ。れ。ふ。り。あ。られ。ま。つ。ば。ら。す。み。よ。し。の。を。と。ひ。む。す。め。と。み。れ。と。あ。か。ぬ。か。も。と。點

せり、霰字はみぞれ、あられ、もとより兩訓あり、玉篇曰、霰思見切、暴雪、東宮切韻曰、霰雨雪雜下也、又

霰星也、水雪相搏如星而散也、ともに以て本説あり、事に、玄たがひて可和之歟、但し四條大納言公任卿の和漢朗

詠集の中に、あられに用らる、

〔枕草子〕ふるものは みぞれはにくけれど、雪のましろにてまじりたるをかし、

〔源氏物語二〕木りんじの祭のうがくに夜更て、いみじうみぞれふる夜、これかれまかりあがる

る所にて、思ひめぐらせば、猶いへちとおもはんがたは又なかりけり、

〔千載和歌集二〕後朱雀院の御時、うへのをのことも、ひんがし山の花見侍けるに、雨のふりにけれ

ば、白川殿にとまりて、をの／＼歌よみ侍けるによみ侍ける、 大納言長家

春雨に散花みればかきくらしみぞれし空の心ちこそすれ

霰

霰ハ、アラレト云フ、雨水ノ凍結シタルモノナリ、